

赤い蠟燭

新美南吉

青空文庫

山から里の方へ遊びにいった猿さるが一本の赤い蠟燭ろうそくを拾いました。赤い蠟燭は沢山たくさんあるものではありません。それで猿は赤い蠟燭を花火だと思ひ込んでしまいました。

猿は拾った赤い蠟燭を大事に山へ持って帰りました。

山では大へんな騒さわぎになりました。何しろ花火などというものは、鹿しかにしても猪ししにしても兎うさぎにしても、亀かめにしても、鼬いたちにしても、狸たぬきにしても、狐きつねにしても、まだ一度も見ることがありません。その花火を猿が拾って来たというのであります。

「ほう、すばらしい」

「これは、すてきなものだ」

鹿や猪や兎や亀や鼬や狸や狐が押合いへしあいして赤い蠟燭を覗のぞきました。すると猿が、

「危あぶない危あぶない。そんなに近よつてはいけないい。爆発するから」といいました。

みんなは驚いて後しりごみ込こみました。

そこで猿は花火というものが、どんなに大きな音をして飛出とびだすか、そしてどんなに美しく空にひろがるか、みんなに話して聞かせました。そんなに美しいものなら見たいものだとみんなは思いました。

「それなら、今晚山の頂上^{てっぺん}に行つてあそこで打上げて見よう」と猿がいました。みんなは大へん喜びました。夜の空に星をふりまくようにばあつとひろがる花火を眼^めに浮べてみんなはうっとりしました。

さて夜になりました。みんなは胸をおどらせて山の頂上^{てっぺん}にやつて行きました。猿はもう赤い蠟燭を木の枝にくくりつけてみんなの来るのを待つていました。

いよいよこれから花火を打上げることになりました。しかし困ったことが出来ました。と申^{もう}しますのは、誰も花火に火をつけようとしなかったからです。みんな花火を見ることは好きでしたが火をつけに行くことは、好きでなかったのであります。

これでは花火はあがりません。そこでくじをひいて、火をつけに行くものを決めることになりました。第一にあたったものは亀でありました。

亀は元気を出して花火の方へやつて行きました。だがうまく火をつけることが出来たでしょうか。いえ、いえ。亀は花火のそばまで来ると首が自然に引^{ひっこ}込んでしまつて出て来なかつたのであります。

そこでくじがまたひかれて、こんどは鼬^{ひつこ}が行くことになりました。鼬は亀よりは幾分ましでした。というのは首を引込めてしまわなかつたからであります。しかし鼬はひどい近^き

眼んがんでありました。だから蠟燭のまわりをきよろきよろとうろついているばかりでありました。

遂々とうとう猪が飛出しました。猪は全く勇まったいさましい獣けだものでした。猪はほんとうにやっていつて火をつけてしまいました。

みんなはびつくりして草むらに飛込み耳を固くふさぎました。耳ばかりでなく眼もふさいでしまいました。

しかし蠟燭はぼんともいわずに静かに燃えているばかりでした。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日第1刷発行

1997（平成9）年7月15日第2刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集第三巻」大日本図書

1980（昭和55）年7月31日初版第1刷発行

初出：「幼稚園と家庭 毎日のお話」育英書院

1936（昭和11）年11月15日

入力：浜野 智

校正：浜野 智

1999年3月1日公開

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い蠟燭

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>